

ボッチョーニの記憶

—第一次世界大戦後の未来派運動の展開をめぐって—

1916年8月、第一次世界大戦の軍営で落馬による事故死を遂げたウンベルト・ボッチョーニは、初期のイタリア未来派における代表的な画家・彫刻家である。第二次世界大戦直後に新しく台頭した美術批評家たちは、彼の死後ファシズム政権へ接近して行ったこの芸術運動をしばしば否定的に捉えたものの、その批評においてもボッチョーニは例外的に、運動が衰退する以前の「英雄時代」を代表する存在として高く評価されてきた。第一次世界大戦後にも引き続き存在した未来派運動の全体を捉えようとする近年の研究者たちは、こうした傾向を「ボッチョーニ中心主義」として批判している。しかし後者は、30年以上にわたって展開された未来派運動の内部に及ぶ、この芸術家の作品やテキストの明らかな影響、とりわけ死後に形成されたボッチョーニ像に関しては、この芸術家自身の評価とも関わる重要な問題であるにもかかわらず等閑視している。

本発表では、二つの論点からボッチョーニ死後の芸術および芸術家像の形成過程に注目する。第一の論点は、未来派の創始者フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティを初めとする、運動を担った中心人物たちがボッチョーニの死後に進めた、芸術家の顕彰とシンボル化である。芸術家の没後まもない1916年12月にミラノで開催された「未来派画家・彫刻家ボッチョーニ大回顧展」以来、未来派は彼を対象とする回顧展をたびたび開催し、1927年にはマリネッティの序文を付した『ボッチョーニ全作品』を刊行している。さらに、1933年6月にミラノのペーザロ画廊で開かれた「ウンベルト・ボッチョーニへの未来派オマージュ」は、ボッチョーニ作品の紹介のみならず、当時未来派運動に参画していたイタリア全土の芸術家を集めた会議や詩のコンテストなどを含めた、総合的なイベントとして特筆される。これら一連の動きは、ボッチョーニのみならず建築家アントニオ・サンテリアらを世界大戦で失い、カルロ・カッラやジーノ・セヴェリーニらが離脱した後の未来派が、ボッチョーニの名の下で運動の再活性化を図ったものと捉えることができる。

第二の論点は、1930年代初頭に地方都市に複数出現した、「ボッチョーニ・グループ」を名乗るサークルの存在である。ヴェローナやマチェラータなど比較的中小規模の都市を活動の拠点に、これらのグループを結成した若い世代の芸術家たちは、マリネッティらによる故人についての言説や、芸術家自身が残した著述の影響を受けつつ、第二次世界大戦期まで活動を展開する。彼らがボッチョーニの造形作品や著述から実際に援用した、あるいはしなかった要素には、若い世代独自の「未来派」としての特徴のみならず、先行世代との齟齬も現れている。以上の考察を通して、ポスト・ボッチョーニ期におけるこの芸術家の受容と、この時代の未来派運動との関係を再検討したい。